

編 集 後 記

学校生活管理指導表を記載するとき、自分が子供の頃を思い出すことがある。特に10代の頃を、50を過ぎた今でも、記憶が最も鮮明に残っているのは10代のことである。そしてやりたいこと、志したこと10代にできたことが、自分の人間形成にかけがえのないものだったとしみじみ思う。たとえ失敗したことでも。

やりたいことをどこまで許可するかを示す学校生活管理指導表は、日本が誇る素晴らしいシステムである。これを適切に運用することが患者さんたちの幸せにつながるのだが、E可か、E禁かを迷うときが問題だ。運動部継続を強く希望したある患者さんは、学校とも話し合いを重ねた上で、E可とし、やり遂げた。充実感に満ちた彼の姿をみると本当に良かったと思うと同時に、心事故がなかったことにほっとする。一方ある患者さんではE禁相当と判断した。その後心不全の悪化はなかったが、人が変わったように塞ぎこみ、何事にも消極的になった姿をみたこともあった。E可としても、E禁としても、患者さんを本当に幸せにできたのか、リスクを冒しすぎたのではないかと悩みはつきない。心事故や心不全悪化の予防にどのように生活管理をすべきか、適切な生活管理に結びつく、さらなるエビデンスに期待したい。これは容易でないが、学校生活管理指導表の運用の実態なども共有できると良いと思う。

(鈴木 博)